

- \* 調査会、本年は夏季合宿を計画しませんので、8月下旬～9月上旬にかけキベリタテハやツマジロウラジャノメ等の近場での調査会を予定しております。  
大菩薩峠付近の一之瀬高原あたりが良いかと思いますが、次号にて企画の方から詳細が知らされると思います、何卒よろしくお願い致します。
- \* 退会（会費未納者を含む）  
  
熱田行宏、鏡味賢二、河井宏彰、コンスター スララット、原田一志、原田慈照、水野貴祥  
村上勝、新井久保、渡部治、山田厚子
- \* 12月例会（セリ会）は12/21となります。
- \* 新年度の名簿は8月末までに送付予定です。今しばらくお待ちください。
- \* 新刊
 

散歩の昆虫記	奥本大三郎	幻戯書房	¥2200	03-5283-3934
やくみつる昆虫図鑑	やくみつる	成美堂出版	¥950	03-5206-8151
里の音の自然誌	内田正吉	エッチエスケー	¥600	03-5155-6552
虫眼で歩けば	鈴木梅花	ブルース、インターアクションズ	¥1600	03-6234-1220
ギフチョウとカンアオイ (岐阜県の記録) 水谷治雄				
		自費出版	¥4200	
		〒500-8314	岐阜県鍛冶屋西町1丁目1	
人と虫	著者多数	栃木県立博物館	¥1000	028-634-1319
小路嘉明の蝶を楽しむ	新田敦子	ありんくりん	¥5000	
		〒904-2232	沖縄県うるま市字川田139	
- \* 新聞紙上より

**昆虫にも頼れる「おばあちゃん」**



**繁殖後のアブラムシ**

植松さんらは、常緑樹のイ  
スノキに巣を作る「ヨシノミヤ  
アブラムシ」を観察。テントウ  
ムシの幼虫などに襲われた時、  
成虫が腹の穴から白い分泌液を  
出し、写真、東大提供、体ご  
と敵に張り付いて行動の自由を  
奪うことを突き止めた。捨て身  
の行動をした成虫は、ほぼすべ  
てが繁殖を終えたメス。繁殖後  
は卵の代わりに防衛用の分泌液  
で腹部を満たすように変化する  
ことも分かった。

人間の場合、「おばあちゃん」  
が長生きし、知識や経験を伝え  
ることが進化上有利に働いたと  
いう説が提唱されている。

**分泌液で敵撃退 子孫守る**

# 虫の特性あやかる意匠

まき え ら でん い ん ろ う  
昆虫蒔絵螺鈿印籠

江戸時代後期

10.6.25  
読者(朝)

江戸博  
蔵めぐり



虫をデザインに取り入れた印籠。印籠は葉を入れる容器だが、腰からぶら下げるぜいたくな飾りものとして江戸初期に武士の間に普及し、江戸後期には富裕な町人の間に広まった。片面にバッタ、もう片面にトンボが蒔絵と螺鈿の技法で描かれている。螺鈿とは、貝の真珠層を極薄く切り抜き、漆で貼り付けて模様をつくる技法。

バッタの羽と、トンボがとまった植物の葉が涼やかに光る貝で表現されている。虫をモチーフにした工芸品は、日本で古くから作られてきた。チヨウは幼虫からさなぎ、成虫へと変態することから、永遠の生命の象徴として扱われた。スズムシやマツムシといった音色を楽しむ虫、闇夜を照らすホタルなどもモチーフになりやすかった。

しかし、ヨーロッパで虫を題材にした工芸品が増えるのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて。日

本の工芸品がヨーロッパに輸入され、その影響がジャポニズムとなつてあらわれた。

日本人が虫をデザインに取り入れたのは、虫の特性を知り、その力にあやかろうという気持ちがあったからだ。トンボは決して後ろに退かないと思われていたことから、「勝虫」とされて武將に好まれ、甲冑や刀鐔などの武器の意匠に取り入れられた。1684年(貞享元年)に刊行された「武器訓蒙図彙」には、トンボのほか、カマキリやセミを兜や前立てなどの意匠に用いた武器が紹介されている。

小さな虫の生態を知り、ひいては自然に敬意と畏怖を抱いてきた日本人。虫とのかかわりを歴史資料や映像、標本などで紹介する大「昆虫博」で、本資料や武器なども展示中。

(江戸東京博物館学芸員 橋本由起子)

1万匹超の貴重な昆虫標本や、虫を題材にした工芸品が並ぶ「大昆虫博」——日本人と虫たちの深く長い歴史（読売新聞社など主催）が22日、東京都墨田区の江戸東京博物館で始まる。

展示されるのは、「ヘラクレスオオカブト」や「トリバネアゲハ」といった世界最大級のカブトムシやチョウの標本のほか、解剖学者の養老孟司さんが集めた約7500匹のゾウムシの標本など。チョウのデザインをあしらった昭和初期の反物なども並び、21日に開かれた内覧会では、招待客約3000人が熱心に見入っていた「写真」。

## 1万匹の標本ずらり

＊「大昆虫博」きょうから



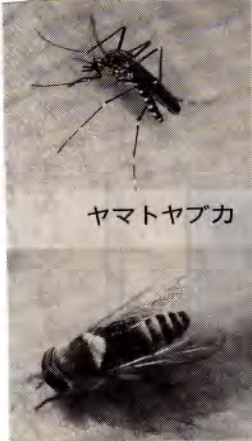
「ブル昆虫記」の翻訳を手がけた仏文学者の奥本大三郎さんは「日本人が昔から昆虫に親しんでいたことを知ってほしい」と話している。9月5日まで。一般1300円、大学・専門学校生1040円、小中高校生と65歳以上は650円。

問い合わせは同博物館（☎03・3626・9974）。

## 夏の虫対策 ②

木、金、土曜掲載

## 健康+



ヤマトヤブカ

イヨシロオビアブ

ともに篠永哲さん提供

夏は吸血する虫も活発になる。蚊、アブ、プユ（プヨ）、マダニなどが。東京医科歯科大非常勤講師、篠永哲さん（国際環境衛生虫病学）によると、日本にいる蚊は100種類以上で、昼間しか刺さない蚊、夜に刺す蚊など、さまざまだ。

プユは5月下旬から7月ごろ、水辺などに発生する。アブは8月ごろ、家畜の血を吸うので牧場などに多く現れる。プユやアブは動物の皮膚を傷つけ流れた血を吸う。アブは衣服の上からでも刺すので、防虫剤は服の上にもかけた方がよさそうだ。

蚊に刺されてかゆくなるのは、蚊が注入した唾液などに対するアレルギー反応だ。かゆくてもひっかいて

## 防虫剤 服の上からも

2010.6.25 読売

はいけない。冷やして炎症を抑える。ステロイドなどの塗り薬もある。

蚊の一種、コガタアカイエカが媒介する日本脳炎の患者発生は年に数人程度だが、命にかかわることがあり、予防接種もある。

篠永さんは「吸血する虫は、呼吸で出る二酸化炭素を感じて動物に近づく。汗をかいたり、アルコールが分解されたりする際は大量の二酸化炭素が出るので虫を寄せ付ける恐れがある」と話す。

マダニの一種、シュルツェマダニに刺されると、刺された箇所から同心円状に赤い斑紋が広がる「ライム病」になることがある。「日本ではまれな病気だが、放置すると長期化する場合もあるので抗菌薬による治療が薦められる」と東京通信病院皮膚科部長、江藤隆史さんは話す。



### 羽化直後の寝ぼけ顔

アゲハ

【開いた羽の差し渡し】65〜90ミリ  
 【国内の分布】日本全土

平地に普通に見られるチョウで、教科書などにもよく登場する。

昼行性のチョウは目がよいので、野外で顔の接写は難しい。この写真は、自宅で幼虫から育てて、羽化した直後に撮影した。羽がまだ固くならないので、飛び立てない。そのため、これだけカメラを近づけて撮影できる。

部屋の少ない我が家では、寝室に飼育ケースを持ち込んで、いろいろな幼虫を育てている。ふたをしっかりとしめるのを忘れて、脱走されることがたまにある。



2010.7.15  
 芋虫の夜中の脱走劇は、暗闇を切り裂くかみさんの悲鳴を引き起こす。こんなことが数度繰り返され、家庭内別居にいたる。かみさんが、虫どもと一緒に部屋には寝られないというわけである。もっともである。こちららは、かみさんを取るか芋虫を取るか、ちょっと悩んで躊躇なく芋虫を取る。

こうして、かみさんは客間に寝具を移動させた。いい写真をとるためには、家庭内別居もいとわれないことが必要である。

(昆虫写真家・伊藤年一)